

# 「スピリチュアリティ」に関する態度についての検討

—大学生を対象とした質問紙調査から—

奥野雅子

## I はじめに

近年の心理臨床では、スピリチュアルケアが注目され、自己の存在価値や生きる意味に対して苦悩する人々へのケアとされている。そこでは、“スピリチュアル”という概念の起源となる「スピリチュアリティ」に対してどのような捉え方がなされているのだろうか。これまで「スピリチュアリティ」の定義は、時代や文化によってさまざまになされてきた。この言葉が日本に入ってきたのは1990年前後であり、当時は「霊性」や「精神性」といった日本語訳が当てられていた。よって、個人が霊性に目覚めるような現象として捉えられていたことになる。しかし、最近では、スピリチュアリティの意味は広義なものとなり、超越したものに対する考え方や態度とされている。

しかし、スピリチュアリティは宗教と混同されて捉えられていることもある。宗教は超越的存在が人間の考え方や行為に意味を与えるものであり、それに基づく実践活動が伴われる。一方、スピリチュアリティは宗教に関連する事象が含まれることもあるが、日常的に存在するものであるため、宗教が介在しなくても用いられる概念である。つまり、スピリチュアリティは個人的で主観的な経験であり態度ということになる。

「スピリチュアリティ」という概念が脚光を浴び、汎用されるようになってきている。しかし、その概念が何を指し示すかということは未だ曖昧であり、個人の捉え方に一任されているという状況にある。また、個人がそれぞれに捉えたスピリチュアリティに対してどのような行動が喚起されるのか、そのことが個人にどのような影響を与えうるのかについては明らかにされていない。そこで、本稿では「スピリチュアリティ」が個人にどのように捉えられ、それに対してどのような態度をとっているのかについて検討することを目的に、大学生を対象とした質問紙調査を行う。さらに、その態度が青年期の個人の成長に関してどのような影響を及ぼすのかについて理論的考察を加える。

## II 問題と目的

### 1. スピリチュアリティを意識する

Walsh (2009a) によれば、「スピリチュアリティは、超越的な考え方や実践を含む人間の体験」と定義されている。超越的とは、認知や経験の枠を超え、理解の外にあるということの意味する。一方、「宗教は聖なる領域をもち、人間の行為や思考に意味を与え、行動様式を形成

する体系」(積, 2012)であるため、宗教はその背後にある信仰集団が実在し、神や仏などの存在を前提とした実践活動が伴われる(奥野, 2019)。これらを比較すると、スピリチュアリティは宗教が存在しない場合でも用いられることになる。

スピリチュアリティを意識するのはどんな時や状況、あるいは人物なのだろうか。たとえば、筆者は「マタギ」を思い浮かべる。「マタギ」とは山岳地帯で狩猟を生業とする人であり、特に秋田県のマタギが有名である。マタギの獲物は主に熊であるが、マタギは熊を崇めて、かつ熊を狩っている。マタギは「自分たちはハンターとは違う」とはっきり言い切る。しかし、その上でその違いをうまく言葉にできないとも語る。マタギは山の神の存在を信じ、人間を生かしてくれる熊に感謝し、狩ってきた熊を神のように扱う。筆者にはマタギの生き方が崇高に思え、マタギが高いスピリチュアリティを所持していると感じられる。それは「山の神の存在を身体感覚で感じる」といった超越的な考え方と「熊を神として扱う」といった行為があるからだ。

一方、マタギのように絶えず自然と対峙するような生活をしていない一般の人間たちは、スピリチュアリティが実際の日常において意識に上りにくいことが考えられる。それはスピリチュアリティが科学的な見解を逸脱するような考え方を意識させるからかもしれない。我々の日常の大半は科学的な思想に基づき、形成されている。たとえば、明日の気象予測は、地球の自転と公転の影響が太陽との位置関係によって変化し季節が生じ、低気圧の発生によって雷雲ができて雷雨となる、というように伝えられる。山の神の怒りによって雷が生じたとは考えにくい。ところが、人は慣習のように自らお墓参りや初詣をする。かなえない願いがあれば神頼みをすることもある。特に注目したいのは、トップアスリートの言動が印象的なことである。フィギュアスケート選手は「氷の神様が自分に微笑んでくれるか」とか、野球選手は「野球の神様は誰に勝利を与えてくれるのか」のように、超越的な存在にしばしば言及することを耳にする。やるべき練習はすべて行い、あとは超越的なものに委ねる態度を表明しているように捉えられる。このように、一流のアスリートは超越的な存在を意識し、それに基づく態度をとっていることになる。つまり、スピリチュアリティを意識することで自身のパフォーマンスを高めていくという態度といえる。

また、藤原(2005)が著書『国家の品格』の中でノーベル賞受賞のための3つの要因について述べているが、それらはスピリチュアリティへの意識に関連していることが考えられる。彼は、インドのある小さな村がノーベル賞受賞者を多く輩出していることに注目し調査したところ、第一に、その村が大変美しい風景に囲まれていたこと、第二に、村の人々は超越的なものに対する畏敬の念があること、第三に、村の人々は何か感動できるような情緒的な心があることを示した。科学の最高峰ともいえるノーベル賞受賞の要因として、スピリチュアリティへの高い意識が挙げられることは、一流のアスリートが最終的にスピリチュアリティへの意識に到達して言及することと共通する。しかし、科学では割り切れないような現象を肯定する態度を、科学を探究する者が持つことの矛盾と、その影響については説明することが難しい。

ところで、一般の人々がスピリチュアリティを高く意識する時がある。それは、「スピリチュアルペイン」と呼ばれるものが生じた時である。窪寺(2005)によれば、人は自身の死に直面しなければならなくなった時、自分の存在はどうなるのか、身体は消失し意識もなくなるのか、といった自分の存在について向き合うことになるという。その存在が無意味であり無価値であると苦悩することを「スピリチュアルペイン」とされ、スピリチュアルペインは「自己の存在の意味と消失から生じる苦痛」と定義されている(村田, 2011)。特に、終末期がん患者の緩和医療の臨床においてスピリチュアルペインからの回復のための支援としてスピリ

チュアルケアがある。人は生きている間には自身の「死」は未経験であり、経験の枠を超えた超越的な事象である。人間には寿命があり必ず死は訪れるが、日常生活の中では意識されないか、意識を回避しているともいえるかもしれない。死ぬことがどのような経験であるのか、死後はどのようなことになるのかについて現在の科学は語ることはできない。よって、死がリアルな現実として自身に迫る時、超越的な考え方を選択せざるを得ない。すべての人間がスピリチュアリティを意識する時であるといえる。

さらに、人は解決できない問題が生じた時もスピリチュアリティへのアクセスを行う。身近な人の死や自然災害など、自身ではコントロールできない問題が降りかかった時である。奥野(2017; 2019)は、河合(1997)が挙げた「最愛の人を交通事故で亡くすという体験をした際になぜそのような悲劇が自分に降りかかったのかを問う」という具体例に対して「その問いは自分の意志や思考を超えた存在があることを前提としている」(河合, 1997)という考え方を取り上げ、スピリチュアリティについての説明を行っている。つまり、こういった超越的な存在を意識することはスピリチュアリティの喚起である。そして、喚起されたスピリチュアリティをどのように認知し、それに対する行動のあり方が重要となる。したがって、人はスピリチュアリティを意識した時、スピリチュアリティに対してどのようなイメージを持ち、どのように振る舞うのかを明らかにすることが求められる。

## 2. スピリチュアリティに関するイメージ

スピリチュアリティを意識する時、人はスピリチュアリティに対してどのようなイメージをもつのであろうか。前述したが、スピリチュアリティという概念は曖昧である。人の属性や文脈によって異なる捉え方がなされる。さらに、宗教学や心理学、あるいは看護学や社会福祉などの領域に従事する専門家が、それぞれの立場でスピリチュアリティを捉えていることが考えられる。

竹田・太湯(2006)は、日本人高齢者のスピリチュアリティの概念構造について検討を行った。スピリチュアリティの具体的内容を読み取ることができる9つの文献を対象に分析した結果、日本人高齢者のスピリチュアリティは「生きる意味・目的」「死と死にゆくことへの態度」「自己超越」「他者との調和」「よりどころ」「自然との融和」という6つの概念から構成されていることが示された。そこで、「死と死にゆくことへの態度」「他者との調和」は高齢者において重要な概念であることが示唆されている。また、それらの概念構造は、「生きる意味・目的」「死と死にゆくことへの態度」という自己に関するものから、「他者との調和」「よりどころ」「自然との融和」という他者や環境に関するものに広がり、最終的には「自己超越」という超越的なものにつながっていくと考察されている。

また、スピリチュアリティのイメージについて看護師と一般の人の両者を対象に質問紙調査を実施し検討した知見がある(小薮・白岩・竹田・太湯, 2009)。そのイメージとして「超越的」「内的自己」「人間存在」「死生観」「ピリーフ」「Well-Being と Pain」「他者と環境」という7つのカテゴリーが抽出されている。その中で、看護師も一般人にも「超越的」と「内的自己」は共通して最も多く、看護師は一般人と比べて「死生観」が多いことが示されている。

さらに、日本人の若者や中高年に共通するスピリチュアリティの構成概念について半構造化面接通して検討したものがある(和・廣野・遠藤・満石・濁川, 2014)。そこでは、「他者とのつながり」「自然との一体感」「畏敬の念」「死を超えた希望」「安心」「自律」という7つのカテゴリーが得られている。

このように、スピリチュアリティにはさまざまな側面が存在し、多様性があることが示され

ている。しかし、その多様性のなかには普遍性があると考えられ、それは超越的なものと自己との関係性に関わるイメージであるといえる。もちろん、スピリチュアリティのイメージが一義的である必要はない。人々はそれぞれの立場でスピリチュアリティを主観的に捉えた上で、それらを日常にどのように活かしていくかが重要である。たとえば、日常生活においてコントロールできない問題が生じた際に、超越的な存在を認知しながらそれに向き合い、自分はどのような行動を選択していくのかといったことが問題解決になる。

### 3. スピリチュアリティを認知した時の行動

スピリチュアリティを認知し意識した時の影響については様々な報告がなされている。奥野(2019)は、Walsh(2009b)に言及し、家族ライフサイクルにおけるスピリチュアリティの影響について以下の様に整理している。まず、新しい家族が誕生する際には結婚式を行うが、その儀式が宗教的儀式的意味合いを含むことから信仰に対する考え方が夫婦関係に影響する。そして、子どもの養育プロセスでは、親が行うスピリチュアルな実践を子どもが内在化していく。たとえば、初詣に行く、お盆やお彼岸にお墓参りに行くなど、超越的な存在に手を合わせて祈る行為などが挙げられている。子どもが青年期以降は親が行ってきた宗教的实践について親とは異なる自分の思想を選択していくこともある。中年期では、身体能力の低下、親の介護や家族メンバーの死に向き合い、自身の生き方を再考しスピリチュアルな影響が高まっていく。老年期になると、仕事の退職後にはスピリチュアリティに即した生活へ傾倒していくことになる。自然に触れるような生活を好み、宗教的实践に参加することが増えていく。スピリチュアリティが促進されることで高齢者の英知は深まっていくとされている。

また、奥野(2019)は、スピリチュアリティを意識することでレジリエンスが高まることを推察している。そこでは『夜と霧』(Frankl, 1947)が取り上げられ、Franklがアウシュビッツ収容所で生き延びたことは高いレジリエンスを所持していたためであり、その理由としてスピリチュアリティの機能が促進されていたことが指摘されている(奥野, 2019)。たとえば、別の収容所に入れられていて会えない妻との目に見えないつながりを信じていたことなどが挙げられている。しかし、スピリチュアリティは肯定的な影響のみではない。スピリチュアリティがストレスに対する対処行動や抑うつ傾向に及ぼす影響を検討した研究がある(神谷・豊里・古謝・奥野, 2013)。その研究では、沖縄に住む高齢者を対象にした質問紙調査を通して因果モデルを構築している。その結果、スピリチュアリティの上昇が、身体的衰えにより引き起こされる情動反応の注意を切り替え気持ちを調節する対処を向上させ、そのことが抑うつ傾向の軽減につながることを示唆されている。一方、スピリチュアリティの上昇は同時に、不快な出来事から逃避し否定的に解釈する行動を助長し、抑うつ傾向の悪化につながるという影響もあることが示されている。これらの結果から、スピリチュアリティの影響には正反対の2つの側面が認められたことになる。

ところで、梶原(2018)は、スピリチュアリティと祈るという行為の関連性について検討している。祈りはスピリチュアリティ及び宗教性に導かれて捧げられる表現であるとされている。加えて、祈りは超越者の存在を前提とするものであること、人間が意識的または無意識的に祈りを捧げることはスピリチュアリティの働きであるとともに、祈りを実践するという行為もまたスピリチュアリティを促進すると述べられている。このことから、スピリチュアリティに関する行為と、スピリチュアリティへの意識は互いに高め合うという相互作用があることが示唆されている。

さらに、スピリチュアルケアの現場における医療従事者のスピリチュアリティとスピリチュ

アルケアの因果関係を示した研究がある（田内・神里, 2009）。それによると、終末期がん患者のケアに携わる看護師は、スピリチュアリティが高いほどスピリチュアルケアを積極的に行っていることが示されている。看護師は終末期がん患者のケアに関わりながら、自分自身のスピリチュアリティを意識していくことが示唆されている。

以上のように、スピリチュアリティを意識する時のスピリチュアリティの概念イメージ、そして、スピリチュアリティを認知した時にどのような行動をとるのかについて概観してきた。しかし、スピリチュアリティへの意識やイメージは多岐にわたり、それによってなされる行動にも多様な側面があることが示されている。特に、スピリチュアリティが肯定的に作用するか否定的に作用するか二局面があることが指摘されている。よって、スピリチュアリティに関する検討は属性や文脈を限定して行う必要がある。これまでは高齢者や医療従事者を対象にした研究が多くなされてきたが、青年期に焦点を当てた検討は見当たらない。そこで、本研究では青年期にいる大学生を対象とする。本研究では大学生を対象に質問紙調査を行い、スピリチュアリティに対する態度について検討を行う。スピリチュアリティに対するイメージとそれを意識する時、それらに対する行動について検討することを目的とする。

### Ⅲ 方法

#### 1) 調査対象者

大学生130名（男性36名、女性93名、不明1名）であり、平均年齢は18.82歳（SD= 0.62）であった。

#### 2) 調査時期

2019年11月

#### 3) 手続き

授業時間の終わりに大学生に質問紙調査への回答を依頼し、許可を取った後質問紙を配布し回収した。その際、回答したくない場合は、無理して回答する必要がないことも伝えた。

#### 4) 質問紙の構成

「スピリチュアリティに関するイメージをどのように感じるか」「スピリチュアリティを意識する時はどんな時か」「スピリチュアリティを意識した時にどのように行動するか」の3点について自由記述で回答を求めた。

#### 5) 分析

得られた自由記述の回答をKJ法によって分類した。

## Ⅳ 結果

### 1. スピリチュアリティに関するイメージ

スピリチュアリティに関するイメージでは、＜心理的＞＜非科学的＞＜被影響的＞＜靈的＞＜超越的＞の5つの大カテゴリーが得られた。＜心理的＞には、「精神」「個人的な心の内面」「感覚」の3つのカテゴリー、＜非科学的＞には、「神秘性」「理論的ではない」「不思議」「可視化できない」「信頼できない」の5つのカテゴリー、＜被影響的＞には、「予知できる」「与えられた力」「恩恵」の3つのカテゴリー、＜靈的＞には、「心霊」「超自然的存在」「靈魂」の3つのカテゴリー、＜超越的＞には、「宗教的な認知」「コントロールできない」の2つのカテゴリーが含まれる。それぞれのカテゴリーに含まれる内容とカテゴリー、大カテゴリーの分類を表1に示す。

表1 スピリチュアリティに関するイメージについてのカテゴリー分類

大カテゴリー	カテゴリー	内容	数
心理的	精神	精神的なもの (51)	75
	個人的な心の内面	心 (5) / 深層心理 (4) / 瞑想 (2) / 心のつながり (1) / 内面 (1) / 気持ち (1) / パーソナリティ (1) / 自己啓発 (1)	
	感覚	第六感 (5) / 直感 (1) / ひらめき (1) / 形而上 (1)	
非科学的	神秘性	神秘的なもの (19)	50
	理論的ではない	理論で説明できない (7) / 科学的根拠なし (3)	
	不思議	不思議な現象 (5) / 信じるか信じないか (2) / 現実離れ (1) / 奇跡 (1)	
	可視化できない	実体がない (3) / 目に見えない (2) / 物質的ではない (1) / まぼろし (1)	
	信頼できない	うさんくさい (2) / 怪しい (1) / 危険 (1) / 迷信 (1)	
被影響的	予知できる	占い (24) / 風水 (5) / 予言 (2) / 星座 (1)	46
	与えられた力	超能力 (4) / オーラ (4)	
	恩恵	パワースポット (4) / パワーストーン (2)	
靈的	心霊	幽霊 (10) / 心霊現象 (9) / オカルト現象 (1) / お化け (1)	31
	超自然的存在	精霊 (4) / 妖精 (1) / 魔女 (1)	
	靈魂	魂 (4)	
超越的	宗教的な認知	神 (9) / 宗教 (8) / 神聖なもの (1) / 信仰 (1) / 心の拠り所 (1) / 悟り (1) / 洗脳 (1)	28
	コントロールできない	運命 (3) / 偶然 (1) / 運 (1) / 天啓 (1)	

### 2. スピリチュアリティを意識する時

スピリチュアリティを意識する時では、＜神秘的体験＞＜非日常的体験＞＜苦悩した時＞＜自己対峙＞＜宗教への関わり＞＜重要な局面＞の6つの大カテゴリーが得られた。＜神秘的体験＞には、「不思議だと感じた時」「偶然だと感じた時」の2つのカテゴリー、＜非日常的体験＞には、「将来への影響を受ける体験」「自然との接点」「芸術に関わる」の3つのカテゴリー、＜苦悩した時＞には、「災難が降りかかる」「自分の状態が悪い時」の2つのカテゴリー、＜自己対峙＞には、「一人でいる時」「自分と向き合う」の2つのカテゴリー、＜宗教への関わり＞には、「宗教的な場所に行く」「宗教的行為」の2つのカテゴリー、＜重要な局面＞には、「大切なイベント」「叶えたい望み」の2つのカテゴリーが含まれる。それぞれのカテゴリーに含まれる内容とカテゴリー、大カテゴリーの分類を表2に示す。

表2 スピリチュアリティを意識する時についてのカテゴリ分類

大カテゴリ	カテゴリ	内容	数
神秘的体験	不思議だと感じた時	不思議な体験 (15) / メディアで不思議なことを見た時 (5) / 不思議な感覚 (3) / 正夢 (4) / デジャブ (2) / 迷信を聞いた時 (1)	36
	偶然だと感じた時	偶然の現象に遭遇 (3) / 偶然望んだことが起こった時 (3)	
非日常的体験	未来への影響を受ける体験	占いをした時 (7) / おみくじ (3) / 風水に関わる (2) / パワーストーンを見るとき (1)	23
	自然との接点	美しい風景を見た時 (5) / 自然の中にいる (2) / 旅行 (1)	
	芸術に関わる	文学体験 (1) / 映画を見た時 (1)	
苦悩した時	災難が降りかかる	悪いことが起こった時 (3) / 怖い話を聞いた時 (3) / 災害が起こった時 (2) / 他者とのコミュニケーション (2) / 他者と対立した時 (1)	20
	自分の状態が悪い時	苦しい時 (4) / 不安な時 (3) / 暗い気持ちの時 (1) / 嫌な予感がする時 (1)	
自己対峙	1人での時	ひらめいた時 (4) / 1人でリラックスしている時 (4) / 何かとのつながりを深く感じた時 (1) / 精神統一するとき (1)	20
	自分と向き合う	自分について考えるとき (5) / 瞑想 (2) / ヨガ (2) / 死について考えるとき (1)	
宗教への関わり	宗教的な場所に行く	寺に行く (5) / 神社に行く (4) / お墓に行く (2)	16
	宗教的行為	お葬式 (2) / 仏壇を拜むとき (1) / 合格祈願 (1) / 神頼み (1)	
重要な局面	大切なイベント	部活動の大会 (3) / 生死にかかわった時 (1) / 大事なことがある時 (1)	7
	叶えたい望み	うまくいくと信じたとき (1) / 叶えたい願いがある時 (1)	

### 3. スピリチュアリティに対する行動

スピリチュアリティに対する行動では、＜肯定的行動＞＜分析＞＜対処的行動＞＜立ち止まる＞＜味わう＞＜否定的行動＞＜宗教への関与＞の7つの大カテゴリが得られた。＜肯定的行動＞には、「自律的行動」「畏敬」の2つのカテゴリ、＜分析＞には、「自己洞察」「情報収集」の2つのカテゴリ、＜対処的行動＞には、「力あるものに従う」「警戒する」の2つのカテゴリ、＜立ち止まる＞には、「静かな受け止め」「行動しない」の2つのカテゴリ、＜味わう＞には、「能動的態度」「積極的受容」の2つのカテゴリ、「否定的行動」には、「拒絶」「回避」の2つのカテゴリ、＜宗教への関与＞には、「宗教的場所に行く」「宗教への依存」の2つのカテゴリが含まれる。それぞれのカテゴリに含まれる内容とカテゴリ、大カテゴリの分類を表3に示す。

表3 スピリチュアリティに対する行動についてのカテゴリ分類

大カテゴリ	カテゴリ	内容	数
肯定的行動	自律的行動	自分の意思を持って行動 (4) / 直感に従った行動 (4) / 瞑想 (3) / 呼吸を整える (2) / 感情コントロール (2) / プラスイメージで行動する (1) / 気合が入る色を身につける (1)	26
	畏敬	正しい振舞 (6) / 神様に感謝 (2) / 善い行い (1)	
分析	自己洞察	自己分析 (10) / 考えを深める (3) / 考え直す (2) / 過去を振り返る (2) / 距離を置いて見る (1)	25
	情報収集	調べる (4) / 占いをする (2) / ラッキーアイテムを知る (1)	
対処的行動	力あるものに従う	従順な行動 (8) / 顔色をうかがう (1)	16
	警戒する	目をつぶる (3) / 声に出す (2) / 用心する (1) / 敏感になる (1)	
立ち止まる	静かな受け止め	安静にする (3) / 流れにかませる (2) / 頭で考えない (1)	12
	行動しない	何も行わない (5) / 呆然とする (1)	
味わう	能動的態度	見えないものに思いを馳せる (3) / 想像する (1) / 感情表現 (1)	8
	積極的受容	感動する (2) / 見とれる (1)	
否定的行動	拒絶	ネガティブになる (2) / 反対の行動をする (1) / 怖がる (1)	7
	回避	無視する (2) / 考えないようにする (1)	
宗教への関与	宗教的場所に行く	お参りに行く (1)	6
	宗教への依存	神頼み (3) / 信仰する (2)	

## Ⅳ 考察

### 1. 大学生のスピリチュアリティに関するイメージの特徴

大学生がスピリチュアリティに関して持つイメージとして、〈心理的〉〈非科学的〉〈被影響的〉〈靈的〉〈超越的〉の5つが存在することが示された。大学生の多くが心理的な観点からスピリチュアリティを捉えていることから、身近なものとして自身に引き寄せて感じている一方で、非科学的なものとして距離を置いている側面もあることが考えられる。また、スピリチュアリティに関するものに影響を受けやすく、靈的や超越的といった別次元のイメージをもっていることが示唆された。

まず、スピリチュアリティに対する心理的イメージとして、漠然と精神的なものであると考えていること、逆に深層心理やパーソナリティなどのように個人的な心の内面として具体的に感じていることの両方があることが確認されている。さらに、第六感や直感などと結び付けて捉えていることから、多様な心理的イメージを抱えていることが考えられる。先行研究と比較すると、本研究の心理的イメージに含まれるカテゴリーである「個人的な心の内面」が、小薮ら(2009)の知見にある「内的自己」と一致するといえる。

次に、大学生のスピリチュアリティに関するイメージとして非科学的に捉えていることが多いのは、青年期の特徴であるといえるかもしれない。神秘的で不思議なものと感じつつも、理論的ではなく可視化できず信頼できないといった観点が示されているため、否定的に感じていることも予想される。本研究で見い出された「非科学的」というイメージは先行研究には認められず、本研究で得られた新たな知見であり、大学生を対象としたことが影響した可能性がある。

しかし、青年期にいる大学生が非科学的と評価しているにもかかわらず、スピリチュアリティをめぐる事象は自身に対して影響を与えうるものとして捉えていることが示唆された。それは、占いや予言などといった予知できるような現象や超能力などに対する憧憬があるのかもしれない。また、パワースポットやパワーストーンなどから恩恵を受けようとする態度もみられた。このようにスピリチュアリティを被影響的なものとして捉えることは先行研究の知見には見当たらないため、青年期独自のイメージであると考えられる。

さらに、心霊や超自然的存在、靈魂などのように、スピリチュアリティを靈的なイメージで捉え、また、宗教的な認知やコントロールできないものとして超越的なイメージで捉えていることも示された。超越的なイメージを含むことに関しては、竹田・太湯(2006)、小薮ら(2009)や和ら(2014)の知見と一致する。ただ、靈的や超越的なイメージが、心理的や非科学的、被影響的なイメージに比べて内容の件数が少なかったことは、大学生という青年期の特徴であると考えられる。

### 2. 大学生のスピリチュアリティを意識する時の特徴

大学生がスピリチュアリティを意識する時には、〈神秘的体験〉〈非日常的体験〉〈苦悩した時〉〈自己対峙〉〈宗教への関わり〉〈重要な局面〉の6つ体験が存在することが示された。それらは、神秘的な体験をした時や非日常的体験、宗教と関わる時のように、日常では得られない経験をした時として示されている反面、日常生活における苦悩や自己対峙、重要な局面といった時にも、スピリチュアリティを意識することが示唆されている。したがって、日常、非日常の両方でスピリチュアリティを意識することが考えられる。



まず、大学生がスピリチュアリティを意識する時の特徴として、不思議だと感じたり、偶然だと感じるような神秘的な体験をした時が挙げられた。それらは、自身が実際に体験したことの他にもメディアを通して見聞きしたことも含まれる。実際の具体的な体験として、正夢やデジャブなどが記述されていた。さらに、偶然の現象が生じたという認知が、スピリチュアリティにつながっていたことが興味深い。これは、ユングが提唱した「共時性（シンクロニシティ）」という概念、つまり、“意味のある偶然の一致”においてスピリチュアルな感覚が喚起されることが示されたといえる。

次に、スピリチュアリティを意識する時の特徴として、未来への影響を受けるような体験をした時、自然や芸術と関わった時が示された。特に、未来への影響では、占いを受けてたりおみくじを引く行為がスピリチュアリティに結びついている。また、自然や芸術にふれるといった心に響くような体験もスピリチュアリティにつながることを示唆されている。

一方、大学生が日常生活の中で感じる苦悩、あるいは重要な局面にスピリチュアリティを意識することが示されたことから、それらを解決しようとする時にスピリチュアリティが喚起されていることが考えられる。スピリチュアリティのイメージを非科学的と捉えている反面、心理的や超越的側面が影響していることが推察される。また、1人で自己と向き合うといった自己対峙の際にもスピリチュアリティを意識することは、スピリチュアリティが心理的イメージであることから裏付けられる。窪寺（2005）や村田（2011）は、自身の死と向き合わなければならなかった際にスピリチュアリティが喚起されると述べているが、青年期にいる大学生は死に向き合うような体験をすることが少ないといえる。しかし、河合（1997）が指摘したコントロールできないことに対峙しなければいけない時に宗教性あるいはスピリチュアリティにつながっていくことは、青年期の大学生でも共通する点であると考えられる。

さらに、大学生が神社仏閣に行ったり、宗教的行為に参加するような宗教への関わりがスピリチュアリティを意識することになることも示唆された。すべての大学生が宗教への関わりを行っているわけではないと予想されるが、青年期においてもそのような体験が貴重であると考えられる。

### 3. 大学生のスピリチュアリティに対する行動の特徴

大学生がスピリチュアリティに対してどのような行動を取るかについては、〈肯定的行動〉〈分析〉〈対処的行動〉〈立ち止まる〉〈味わう〉〈否定的行動〉〈宗教への関与〉の7つが示された。それらの行動特徴は、分析をするといった科学的態度や、味わうや立ち止まるといった情緒的態度、即時的な対処から肯定的・否定的な態度に至るまで、多様であることが示唆された。

まず、大学生はスピリチュアリティに関する事象に対して畏敬の念を持ち、自分の意思や直感に従った行動を選択することが示された。また、即時的な対処行動として警戒することや、スピリチュアリティに関する事象から連想される示唆に従順な態度を取ること、逆に、拒絶や回避といった否定的な態度になることも示されている。このように、スピリチュアリティに対する態度について肯定的な面と否定的な面の2局面があることは、神谷ら（2013）の知見と一致する。しかし、藤原（2005）が重要と指摘した畏敬の念を持つことや、意思を持った行動が引き出される面は青年期にいる大学生のさらなる成長を促す効果があるものと推察される。

次に、大学生の態度として、スピリチュアリティに関する事象について情報収集し自己洞察を行うといった分析を指向する態度が挙げられる。スピリチュアリティに関するイメージが非科学的という観点があるため、それに対して何らかの説明や解釈につなげることができるかと

いう試みであると考えられる。こういった分析的態度がみられたことは、大学生が非科学よりも科学的なものを好むといった特徴が表現されたものと考えられる。

さらに、何も行動せず静かに受け止めるといった立ち止まる態度や、見えないものに思いを馳せ想像するような能動的態度、感動するといった積極的受容もみられた。これらのことから大学生がスピリチュアリティに対して情緒的な反応をしていることが考えられる。加えて、スピリチュアリティに関する事象に触れ、お参りに行ったり神頼みするなど宗教への関与が引き出されることも示唆された。こういった宗教に関わる態度が引き出されることは、梶原(2018)がスピリチュアリティへの意識が祈る行為を促進することを示唆したことから、日常生活において宗教を意識することが少ない大学生にも共通して作用することが考えられる。

## V 総合考察

### 1. スピリチュアリティを意識する時、イメージ、行動の関連性

青年期にいる大学生がスピリチュアリティを意識し、スピリチュアリティに関するイメージを認知し、それに対してどのような行動を取るかについての関連性については多様なプロセスを辿ることが考えられる。スピリチュアリティを意識する時からイメージへの影響とイメージから行動への影響について、これまでの見解を整理し、図1に示す。図の中にある実線の矢印は主な影響として推察し、図に示した。

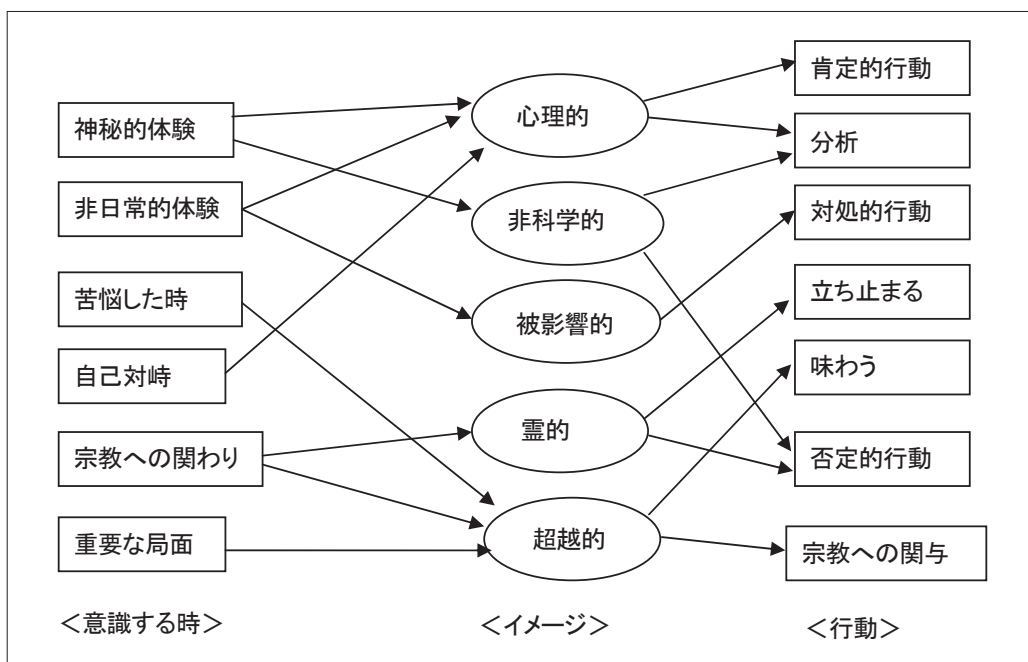


図1 スピリチュアリティを意識する時、イメージ、行動の関連性

まず、スピリチュアリティを意識する時からそのイメージ形成に対する主な影響については、神秘的な体験をした時に心理的あるいは非科学的イメージとして喚起され、非日常的体験

では心理的あるいは被影響のイメージ、苦悩した時は超越的、自己対峙の際は心理的、宗教への関わりは霊的あるいは超越的、重要な局面では超越的イメージを持つことにつながると考えられる。

次に、スピリチュアリティのイメージからそれによって誘発される主な行動としては、心理的イメージをもつのであれば、肯定的行動や分析的態度がとられることになる。非科学的イメージであれば分析と否定的行動、被影響的イメージであれば対処的行動、霊的イメージであれば立ち止まることや否定的行動、超越的イメージであれば味わうことや宗教への関与につながる事が考えられる。

青年期にいる大学生がどのような時にスピリチュアリティを意識するかについては、その個人の家族ライフサイクルにおいて家族が有するスピリチュアリティや宗教的実践にも影響を受けていることが考えられる。よって、どんな時にスピリチュアリティを意識したら良いかということに正解はない。しかし、スピリチュアリティのイメージが行動に与える影響については、拒絶や回避という否定的行動をとってしまうと、何かを再考したり、新しい考え方がひらめいたりする機会を失ってしまうことになる。一方、自律的行動や畏敬の念が導けるような肯定的行動であれば、新しい価値感を獲得したり、自身の中にあるさらなる可能性に気付くチャンスがあるのではないかと推察される。

## 2. 臨床への示唆

臨床現場において、スピリチュアリティという概念への意識がスピリチュアルケアへの注目から始まったことを鑑み、大学生がスピリチュアリティを意識しイメージすることが、彼らの精神的成長に寄与するものであることが望ましい。まず、大学生によるスピリチュアリティに対するイメージの特徴として「非科学的」という観点がある。非科学的であるという捉え方は根拠がなく可視化できないことが理由であるが、人間の現象は可視化できることが本質であるとはいえない。Bateson (1972; 1975) が「マインド」(精神)とは何かを追求する中で「聖跡(sacrament)」に言及し「内的で霊的な恩恵の外的で可視的なしるし」と定義しているが、その意図として、可視的なものは単に本質のしるしであって本質そのものではないことが理解できる。したがって、大学生がスピリチュアリティを非科学的に捉えたとしても、それに対して否定的態度を示すだけでなく、それらに向き合う態度が物事の本質を希求することを通して彼らの精神的成熟のためには必要なのではないだろうか。

また、Bateson & Bateson (1987) は、「超越的なものを完全に信じるのではなく、科学的なものにしか依拠しないというわけでもない」というスタンスをとるべきと主張している。そこでは、一見競合するかのように見える2つの認識論は互いに相補的な関係にあることが説明されている。つまり、自身の考え方として科学か非科学かのいずれかを選ぶ必要はないと捉えられる。内田 (2014) は「結論が出ないことに耐える能力が知性である」と述べているが、青年期の大学生にとっては必要な態度といえるかもしれない。

大学生がスピリチュアリティに対して「非科学的」というイメージをもちつつも「心理的」なイメージをもつことは望ましいといえるだろう。心理的イメージをもつということは、「アナロジー」という力が必要である。アナロジーとは「類比」のことを指すが、ある状況や事物を別の状況や事物に置き換えて理解することである。釈 (2017) はアナロジーについて、たとえば“火が消える様子に生命のはかなさを感じる”や“亡くなった人がいつも見ていてくれる”などを例示し、人間の高度な知的能力としている。このような抽象的・形而上的な思考能力によって超自然的存在を実感できるとされている。したがって、スピリチュアリティに心

理的イメージをもつことは知的能力の表現であるとも考えられる。こういったアナロジーの力を促進していくことは、本研究で示された見えないものに思いを馳せ想像するような“能動的態度”に相当するといえる。また、それらに対して感動するといった“積極的受容”のような情緒的な心は大学生にとっては精神的成長に貢献することであるといえるだろう。

## VI まとめと今後の課題

本研究では、大学生を対象として質問紙調査を実施し、スピリチュアリティに関する態度を検討してきた。大学生それぞれはスピリチュアリティを意識する時にスピリチュアリティに対する多様なイメージを抱き、それによってさまざまな行動が喚起されていることが示された。このようなスピリチュアリティに対する態度が大学生の精神的成長を促進する方向に機能することが望ましいことも論じてきた。特に、大学生はスピリチュアリティをイメージする際に、科学と非科学の間で揺れ動くことが考えられるが、揺れ動く自身に対して結論を急がずに俯瞰的視座に立ち続けることが望ましいといえるだろう。青年期にいる大学生が自身の人生を推し進める中で時にはコントロール不能な苦悩に直面した際、超越的存在と科学のあわいにたたずみ、どちらにも偏らずバランスを取りながら問題解決に向き合っていくことが求められるのではないだろうか。

本研究は大学生を対象とした質問紙調査であり、スピリチュアリティに関する態度は発達段階が青年期という時期に限定されているものである。様々な発達段階によって得られる結果は異なることが考えられる。今後は、思春期や壮年期などにも焦点を当てて調査を展開することが必要である。また、緩和ケアを行う心理臨床家を対象としたスピリチュアリティに関する意識調査も求められる。さらに、実際の臨床現場でスピリチュアリティをめぐる事象に焦点を当てた事例研究の累積も重要であるといえるだろう。

## 引用文献

- Bateson, G. (1972). *Step to an ecology of mind*. N Y : Brockman Inc. (佐藤良明訳 (2000). 精神の生態学 改訂第2版 新思索社)
- Bateson, G. (1979). *Mind and Nature*. N Y : Brockman Inc. (佐藤良明訳 (2001). 精神と自然—生きた世界の認識論— 新思索社)
- Bateson, G. & Bateson, M. C. (1987). *Angels fear : Towards an epistemology of the sacred*. New York : John Brockman Associate Inc. (星川淳訳 (1992). 天使のおそれ—聖なるもののエピステモロジー— 青土社)
- Frankl, V. (1947). *Trotzdem Ja zum Leben sagen: Ein Psychologe erlebt das Konzentrationslager*, Kösel-Verlag, München (池田香代子訳 (2002). 夜と霧 みすず書房)
- 藤原正彦 (2005). 国家の品格 新潮社
- 梶原直美 (2018). 祈りとスピリチュアリティ—それぞれの作用と相互の関連性をめぐって— 川崎医療福祉学会誌, 28 (1), 65-76.
- 神谷ひかる・豊里竹彦・古謝安子・奥古田孝夫 (2013). 地域高齢者のスピリチュアリティがストレス認知—ストレス対処行動を介在に抑うつ傾向に及ぼす影響 琉球医学会誌, 32, 33-44.
- 和秀俊・廣野正子・遠藤伸太郎・満石寿・濁川孝志 (2014). 日本人の持つスピリチュアリティ概念構造の探索的な分析 立教大学コミュニティ福祉学部紀要, 16, 39-50.
- 河合隼雄 (1997). 宗教と宗教性 河合隼雄・村上陽一郎著 内なるものとしての宗教 pp.225-243.

- 小藪智子・白岩千恵子・竹田恵子・太湯好子 (2009). スピリチュアリティの認知の有無と言葉のイメージ—緩和ケア病棟の看護師, 一般病棟の看護師, 一般人, 大学生の特徴—. 川崎医療福祉学会誌, 19 (1), 59-71.
- 窪寺俊之 (2005). スピリチュアルケアとは何か—こころの臨床, 24 (2), 164-169.
- 村田久行 (2011). 終末期がん患者のスピリチュアルペインとそのケア—日本ペインクリニック学会誌, 18(1), 1-8.
- 奥野雅子 (2017). 宗教と心理臨床の関係性をめぐる一考察—仏教との重なりと差異に着目した検討— アルテス リベラレス (岩手大学人文社会科学部紀要), 101, 57-69.
- 奥野雅子 (2019). スピリチュアリティにむき合うか?—家族療法の視点から— アルテス リベラレス (岩手大学人文社会科学部紀要), 104, 13-24.
- 釈轍宗 (2012). 仏教の基盤をひとまとめ—内田樹・釈轍宗著—いきなりはじめる仏教入門—角川ソフィア文庫 pp70-82.
- 釈轍宗 (2017). 落語に花咲く仏教: 宗教と芸能は共振する—朝日新聞出版
- 竹田恵子・太湯好子 (2006). 日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討—川崎医療福祉学会誌, 16 (1), 53-66.
- 田内香織・神里みどり (2009). 終末期がん患者のケアに携わる看護師のスピリチュアリティとスピリチュアルケアの因果関係に関する研究—日本看護科学会誌, 1, 25-31.
- 内田樹 (2004). 死者と身体—コミュニケーションの磁場—医学書院
- Walsh, F. (2009a). Religion, Spirituality, and the Family. In F. Walsh (Ed.), *Spiritual Resources in Family Therapy* (2nd ed.). New York: Guilford Press, pp 3-30.
- Walsh, F. (2009b). Integrating Spirituality in Family Therapy. In F. Walsh (Ed.), *Spiritual Resources in Family Therapy* (2nd ed.). New York: Guilford Press, pp31-61.

#### (付記)

本稿は、日本学術振興会・2020年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C））「スピリチュアルケアにおける心理臨床家と仏教者の役割の重なりと差異に関する研究」（課題番号20K03455 研究代表者・奥野雅子）の研究成果の一部である。